

振り返る・乗り越える

奨励	渡辺 好章〔わたなべ・よしあき〕
奨励者紹介	同志社大学生命医科学部教授
研究テーマ	超音波エレクトロニクス、医用超音波応用

わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

(ヨハネの黙示録 21章1―4節)

はじめに

この建物は先日、3月30日に献堂式が行われました。そのチャペルで話す機会を与えていただきましたこと、感謝いたします。私自身はキリスト教の信者ではなく、特定の宗教を信じる者でもありません。そういう者がこの場であたかも神を見たかのようなことを喋るのは、おこがましいと思っております。長く大学の中で研究活動をして過ごしていると、「これはひょっとしたら何らかの見えざる手というものがあるのではないか」と感じる場面が多々あります。そういうことについて、いろいろ考えたことを今日はお話をさせていただきます。

『モダン・タイムス』化する現代

この追悼礼拝は、尼崎のJR福知山線脱線事故と福島でのバス事故を覚えて始められ、前年度にお亡くなりになった方々も共に追悼する礼拝ですが、「今の時代、世の中はどっちに流れているのだろうか」と時々考えることがあります。尼崎の事故があり、バスの事故も毎年のようにありました。3・11の大震災、その後の原子炉のメルトダウンという事故、最近では飛行機の着陸失敗、手術ミス、いろいろなことが起こっています。こういうことは何が原因で起こるのか、と振り返る機会が与えられているのかなと思っております。私は技術者ですから、設計図通りものを作れば、誰が作っても同じものができることが正しいと思っています。しかしながらこれらが、設計図通りに完全に100%で動作しないというところが、「見えざる手」ということを感じる瞬間であります。事故の原因をたどっていきますと、そのほとんどが機械を信用しすぎて起こったといっても過言でないかもしれません。電車は大丈夫だと百数十キロのスピードでカーブを曲がる。少々の地震でも潰れないだろう、電波の誘導に乗せていけば大丈夫だろう、と機械に頼る時代が21世紀になって特に強く進んでいるように思います。医療現場に至っては、手術室はほとんど電子機器の集合体というのが現状です。医者が最後まで自分の力でできることはほんの一瞬、自分で決めるということころだけ。あとはある程度、機械がガイディングしています。命に重きをおいた医者のような職業ならば、自分の判断の重要性は分かっていると思いますが、一般の人びとでは単に機械の言うとおりにしているという場面が、この頃増えてきているように思います。

チャップリンの『モダン・タイムス』は人が機械を使うのではなく、機械に人が使われていることを模擬し、揶揄した映画です。あの映画ができて80年ぐらい経つのですが、映画と同じことが現実には起こっているのではないかという気がします。その時に我々は何をすればいいのか。それが「振り返る」ということの一つではないかと思います。当然、大きな事故ですと事故原因についての振り返りが行われていますが、「二度とこういう事故は起こしません」と何回もメディアに流れ、それが見事に裏切られた事実も我々は知っています。『モダン・タイムス』が現実になっているような時代に、何が大事なのだろうと改めて問い直してみるべきだと思います。この延長線上で考えていくと、ロボットが出てきています。今や工場の生産現場ではロボットが生産力の半分、あるいはそれ以上の労働力となって働いている状況があります。それによってコストは下がる、しかし、人の職場がなくなってきている現実があります。さらに今は、ロボットに知能を与えるという方向に世の中は進みつつあります。これが果たして正しいかどうか、我々は振り返る必要があるのではないかと思います。

振り返ること・考えること

内なる反省という意味の内省という言葉があります。振り返り確認するという言葉ですが、自身を振り返るということは非常に難しい気がします。原因と結果を振り返る。事件を振り返る。ハードウェア的には分らないが、我々がやってきたこと、判断したこととはどうだったのか。自分の意思でしたことはどうだったかを考えだすと、一体自分は何なのか、何をしていたのだろうか、いろいろなことに思いがめぐることになります。5年前の自分と今の自分は果たして同一人物なのか。時間とは何なのか、という哲学の世界に入っていくような気がします。内省とは重要な言葉だと思えます。

「人間は考える葦である」という哲学者パスカルの言葉があります。考えるということは人間としてやるべき重要なことであって、考えることが内省、振り返ることとうまくつながっていくと、未来に向けて自分たちをコントロールする力が養えると思います。しかしながら、その一番の人間の根幹である「考える」ということが、機械がすべてやってくれるという「機械過信主義」が続くと、人間のもっている本能としての「考える」ということが弱くなっていくという危機を感じる時があります。

今、このままだけ人間は考えなくなる。考えなくなると、去年に見習い、前例に従う。ひと昔前の、すべてのものがつながっていない、すべての情報を見ることができない時代であれば、次のステップでまた違う出会いがあり、修正されていく過程があるように思いますが、現代のようにインターネットが発達したなかでは、我々が考えているつもりでも、考えるのではなく、検索する方向へ流れてしまうのではないかと思います。たとえば、誰が何を考えたとしても、行き着く先は答えが極めて限られてくる。検索の仕方を少々変えたとしても、行き着く先は決まってくる。こういう時代が続き、自分がやっても、誰がやっても結果が同じになると、これはまたさらに考えるということそのものをしなくなるきっかけにもなってしまふように思います。考えるから人である、川原に生えている葦は考えない。葦が考えだしたら葦が人であると言ったのがパスカルです。けだし名言であります。

インターネットの落とし穴

今のように、ウェブですべてがつながっている時代をこのまま続けていくとどうなるかということ、一度、振り返りつつ、考えてみたいと思います。機械過信と申しましたが、今の機械過信はすなわちコンピュータ過信。コンピュータは間違いを起こさない信頼を寄せてしまうと、人の答えよりもコンピュータの答えを信用する。医療現場でも血液検査結果のデータばかりを信じて患者の顔色を見ないことが生じているのは、象徴的なことだと思います。そうした状況にある時、我々はどうにしてこの状況を乗り越えていけばいいのにも、思いを馳せる必要があると思います。

今年の大学の入学式で、ある国立大学の学長が「君らの手にあるスマートフォンを捨てなさい」と学生に向けてアピールを行いました。賛否両論、その後、多数の意見が出ていましたが、一石を投じていると思います。時間、情報にがんじがらめにされている自分が見えることがあると思います。時間に縛られることは自分自身をなくすことにもつながります。自分をなくさないようにするためには何をすればいいか。スマートフォンを置くべきなのか、はたまた違うことを考えればいいのか。少なくともスマートフォンの中に自分を入れ込んでしまう行為は、自殺行為に近いと思います。インターネットというのは確かに偉大なデータベースであって、そのなかで検索をかければ誰でもほぼ正解に近いところに行き着きます。それはなぜかと考えてみると、インターネットに蓄積されているデータはすべからず、すべて過去のものです。未来のものは一切入ってない。未来予測は述べられているかもしれませんが、過去のデータを集計してそのなかで一番いいものだけをまとめあげていくと、機械的には答えは一つとなってしまふ。果たしてそれでいいのでしょうか。

そうすると、この状況を変えていくためには何をしなければならないのか。一つのところに必然的に行き着くインターネットの検索という機能は果たしているのか。そうでない何かを求める。それは偶然性、出会いという言葉で象徴されるものではないかと思えます。

考えてみると、「人」とひと口で括りますが、個人個人すべて顔形、大きさ、考え方、全部違います。個性も違う。でも我々はその「人」としてまとめているところに一つのヒントがあらうかと思えます。それを成しているのが、今の生命科学で分かっているDNAの組み合わせの数と同時に、ある程度、揺らぎをもっているということに起因していると思います。コンピュータの検索は揺らぎがありません。どこからスタートしてもゴールはほぼ同じところを探してくるでしょう。そうではない自分自身のワールドを創っていくことを常に意識して行うことが、我々には必要ではないかと思えます。

意識をもつこと・出会い

重要なのは「意識」という言葉だと思います。皆さんの頭の中に興味をもっているいろいろな言葉がどれだけ入っているのでしょうか。何かをしたいという学生には、「ああいうことをしたい」「ああいう人になりたい」といろいろな思いがある。思い続けることは重要なことだと思います。思い続けるとどういうことが起こるか。たとえば「イチローのようになりたい」と思い続けると野球が好きになる。身の回りにあるボールが好きになる。さらに自分自身のトレーニングをやる。野球に関して勉強する。興味をもつものを整理する。必然的にたくさん自分のやりたいものの引き出しの中にキーワードがたまっていきます。それが意識そのものだと思います。それをもって毎日生活していると、身の回りにあふれている情報のなかから、それと相性のいいものが自ずと先方から近寄ってくるという気がします。それが「見えざる神の手が導いた出会い」と思っております。

図書館へふと入った、本屋さんに入った時に手にした本によってその人の人生が変わる。よく聞く話です。どこかでずれ違った時、誰かが喋っていた言葉がきっかけになって人生が変わる。それは受け身で誰かが言ったことを聞いたからそうなったのだと思うのですが、聞いた人、感じた人が、意識してそのことを引き出しに入れていなかったら、多分、聞き過ぎてしまったのではないかと思います。

人は考える輩である。考え続けることの難しさを感じるところです。脳は非常にたくさんのメモリからできていると言われていますが、それが別に文字で入っているのではなく、イメージベースというか、こんなものだろうという、ポヤツとしたものが脳の中に分散している。それが何らかの出会いや機会で見え隠れする形で何かのヒントが浮かぶ。それがまさしく「出会い」の瞬間だと思います。出会いを口を開けて待っているだけでは一生、意味のある出会いは訪れないと思います。そうではなくて、常に問題意識、あるいは興味をもって頭の中に多数のキーワード、引き出しをもつ。これが振り返った自分を結果的に乗り越えさせる大きな力になるのではないかと思います。易しそうに見えて考え続けることは結構難しいことだと思います。しかし学生諸君は、考えるための時間を大学というキャンパスで与えられていると思います。考えると同時に、人と出会えるチャンス、よい師に出会えるチャンスがある。このようなチャペルで、たまたま聞いた話で「そういうものかな」と思ったこともあるでしょうし、講義の端々に出てくる言葉が気になって調べたら、そこからいくらでも話が展開できるはずです。ただし条件があって、それに対する意識をもっていること、これに尽きると思います。考えるすなわち「意識をもつこと」、これに努めてもらいたいと思います。

おわりに

振り返るということ、さらに振り返りから得られたさまざまな事象を頭の中に蓄積して、そして乗り越えていく、これによって地球上に住む我々の未来に初めて明るいものが見えてくるのではないかと思います。考えをやめた時、行き着く先は、すべての人が同一化し、すべての物が一つになったり、区別のないものになっていく。

一度自分自身の今までやってきたことを振り返ってみてください。このような礼拝も振り返る機会をもつ一つのきっかけになっていると思います。振り返らなければキーワードは手に入らない。それによって次の乗り越えるステップが開けてくる。そうして生きていくことの大事さ、楽しさを身につけてくれれば幸いです。これにて今日のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

2015年4月22日 京田辺水曜チャペル・アワー「逝去者追悼礼拝奨励」記録